

外国人の目から見た関東大震災の被害と復興に関する研究

代表 落合 知帆（京都大学大学院地球環境学堂准教授）

〔研究報告要旨〕

本年9月1日、関東大震災から100年を迎える。本調査研究ではまず、神奈川県内に残る関東大震災時に関する文献を収集し、当時の状況を把握するとともに、外国人の視点から関東大震災の被災直後から復興までの状況把握や対応について明らかにすること目的とした。これまで、関東大震災当時の様子は限られた外国人による文献にて知られてきた。しかし、海外にはまだ未確認の報告書、日記、家族への手紙、写真などが保管されている可能性が高く、これらの文書の発見とそれらの資料を基に被災後の状況を把握する事を試みた。

調査は、既往研究に記載のある被災当時日本で活躍していた外国人生存者や、当時の様子を知らせた、または知らされた外国人に関する資料をインターネットを活用しウェブサイトまたは国内外図書館に保管されているコレクションの中から検索し、新たな資料の発見および収集を行った。これまで知られていなかった手記、日記、家族に宛てた手紙、彼らによって撮影された写真などを数多く収集することが出来た。ただし、新たに発見された資料の中には手書きの手紙やサインなども多く、それらを読解するのに時間がかかり、今後さらに作業を進める必要がある。一方で、コロナ禍の影響を受け、直接確認が難しい時期が長くあったため、一部の調査は震災当時、国内において外国人が多く滞在していた箱根や湘南を対象とし、情報の収集を行った。特に箱根に関しては外国人が多く滞在していたホテルから新たな資料が発見され、被災直後から数日間の被災状況の把握、交通機関の被災と復旧・復興に関する情報を収集することが出来た。

当時日本、特に東京や神奈川に滞在していた外国人の多くが被災し、被災現場から避難する中で悲惨な状況を目撃し、苦しい経験をしていた。また、外国人ネットワークにより、死亡した知人たちの被災状況などを把握していた。さらに、学校や宗教関係者が積極的に活動し、献身的な救護活動を行う他、母国での募金活動などに奔走していたことを明らかにすることが出来た。